

道教育大附属札幌中の研究概要

上田教諭 明

道教育大学附属札幌中学校の二十四年度教育研究大会（七月三十一日付）で発表された、研究概要は以下のとおり。

グローバルマインド育成 社会築き未来切り拓く生徒を

本校の研究は、子どもの学びにかかわる生徒、教師、保護者および地域の方々との有機的につながり「子どもの学びの姿」を中心に、学び合い、高め合い、相互に機能していく場として、学校づくりを行う「共創の学校」の理念のもと、進めている。そして、その理念のもとで、生徒の実態や社会、学校教育に求められる、その時々々の課題をかんがみ「求める生徒の姿」を設定している。

本校の研究は「求める生徒の姿」の実現に向けたものであり、その実現に向けて、研究主題、研究仮説を設定し、理論化を図り、実践する研究が、本校研究の特徴である。

今次における「求める生徒の姿」は、本校生徒の実態に加え、現在、直面している様々な地球社会における課題を加味し、十年後、二十年後の社会を捉え、子どもたちの未来における姿を描き、設定していった。

本校生徒の実態について、集団に対する所属意識や、仲間とのつながりに安心感があるといった、支持の風土が醸成され、学び合いに必要な学習環境が整っている。しかし、思い切った自らの困難を乗り越えていくこととする姿勢や、現状よりも、さらによいものを目指していくこととする姿勢には、弱さを感じる。いわば、新たな強い一歩を踏み出す気持ちに、弱い部分があるということが課題として挙げられる。

地球社会に目を向けると、現代は多様性の時代といわれる。日本社会も、外国籍の人や、両親のいずれかが外国籍の人、日本国籍をもつ人でも海外で生まれ育った人や、複数の文化的背景をもつ人など、職場や学校、地域社会での文化的多様性が増している。

十年後、二十年後の子どもたちの未来は、グローバル化がもたらす様々な国の人や文化とのかわりが、一層増え、これらは健康、産業、法律、教育など様々な場面で異なる文化をもつ人々と協力、共存する社会となっていくだろう。そうした社会の構造的な変化の中で、学習指導要領の理念である、生きる力を育むことはますます重要になっていくと考えられる。人々が豊かな心をもち、相互理解を図り、共生できる人間の育成がこれからの教育における現実的課題ともいえる。

私たちが育てたい生徒とは、いかなる環境においても、よりよい社会を築き、そして、自ら問題を解決することに向け、行動することのできる生徒であり、そのために、強い一歩を踏み

人権尊重など当事者意識を

地球の現状や未来に向けて関心をもち、地球的課題を解決しようとする意欲・態度など、五つそれぞれのグローバルマインドに必要な要素が、構造化、体系化された当事者意識が育まれることを目指している。

これまでの実践研究から具体的な例をあげる。

①「グローバルマインドに必要な要素」の「地球の現状や未来について関心をもち、自然や環境における地球的課題を解決しようとする意欲・態度を地球環境にかかわる教材・題材から育むこと」を自指した。社会科の授業で、地球的課題を考察するといったグローバルな視点からのアプローチ、また特別活動での地域の自然をとりまわるといった、ローカルな視点からのアプローチにより、地球的課題を解決しようとする当事者意識を育むことを自指した。

②「人権や社会の平和について関心をもち、それらを尊重していきこうとする意欲・態度」については、地域や世界にかかわる視点からの育みを自指し、技術・家庭科の家庭分野における、地域に住んでいる幼児とその保護者との交流から、共生の視点を育むことといったローカルな視点からのアプローチや、保健体育科での、障がりの国際大会参加を考察することが、オリンピックとは何か、人権とは何かについて考えを深めていくといった、グローバルな視点からのアプローチによって、人権や社会の平和について尊重していきこうとする当事者意識を育むことを自指した。

③「多様な他者・文化とのかかわりから、柔軟な思考力・多様なものの見方をすることが出来る能力」については、他文化共生にか

ヒト・モノ・コトの価値を感じ

研究仮説は、養育の実現にある。それは、将来にわたって生きて働く資質を育み、求める生徒の姿「社会を築き、未来を切り拓く生徒」の実現を目指すものである。求める生徒の姿の実現のため「グローバルマインド」を育み、そして「グローバルマインド」を、将来にわたって持続するために、「感性を磨く学び合い」を機能させていくこととして、研究仮説を設定し進めてきた。

今次研究の中間となる昨年の秋には、初年度から継続して行ってきた生徒アンケートを分析し、求める生徒の姿に迫るための検証を行った。

そこで検証では、教師において、生徒においても「グローバルマインド」が構造化・体系化されていないという課題が浮き彫り

その定義を「持続可能な人間関係を築くことに加え、社会における諸問題の解決に向けた、探究的な学びを通じ行なっている。こうした三年間の学びから、社会の中でよりよい人間関係を築くものとして本校では総合的な学習の時間を行なっている。

グローバルマインドを育むことを意識した授業を行う際に、そのグローバルマインドが、将来にわたって生きてはたかま資質としてもち続けられるためには、「感性を磨く学び合い」を機能させることが必要であるとして研究を進めている。

今次研究では、「感性を磨く学び合い」を、全領域での実践を自指し探究している。それは「知性」の育みや「知」の創造・主題を置きつつも、「感性を磨く」ことを大切に、互いの感性を磨き、磨かれる経験の中で得られる知が、表面的な知ではない、実感に伴う深い「知」となるのではないかと考えている。

つまり、感性を磨く学び合いの目的は、「将来にわたって生きて働く資質」を育むためであり、そのための実感に伴う深い「知」は「感性を磨く学び合い」によって生み出されるものと考えている。

習の時間、特別活動において各領域の特性を生かしつつ、グローバルマインドを育むことに重点化を図った指導を行い、生徒の中で、グローバルマインドが構造化、体系化され高まってくることを目指している。

特に総合的な学習の時間は、今次研究より「コミュニケーション能力、情報活用能力と人間関係形成力」を育むことと、次の二年生では、自分たちの住む、北海道の文化や文化についての理解を深めたい、海外の中学生との交流から外国の文化について知ったりするといった、異文化をもつ人々とのかわりをもつことが求められている。三年生では、一年生からの継続内容

「ヒト・モノ・コトの価値を感じ」のとし、三年間のカリキュラムを、構造的に編成することで「グローバルマインド」を育み、求める生徒の姿の実現に迫ると考え作成した。

新しく作成したカリキュラムの全体構造は、各学年それぞれに中心となる「グローバルマインド」に必要な要素を設定した。これらは、各学年それぞれ、特別活動の旅行・集団宿泊的行事における内容の関連も含め、各教科や領域と総合的な学習の時間のつながりを重視し、設定したものである。

「グローバルマインド」に必要な要素の①をそれぞれ、各学年の中心の要素とする。三年間の総合的な学習の時間の新設は、文化や価値の過いを実感するものとなった。こうしたことは、各教科における学びでも大きな影響

である、海外の中学生との人間関係を築くことに加え、社会における諸問題の解決に向けた、探究的な学びを通じ行なっている。こうした三年間の学びから、社会の中でよりよい人間関係を築くものとして本校では総合的な学習の時間を行なっている。

グローバルマインドを育むことを意識した授業を行う際に、そのグローバルマインドが、将来にわたって生きてはたかま資質としてもち続けられるためには、「感性を磨く学び合い」を機能させることが必要であるとして研究を進めている。

今次研究では、「感性を磨く学び合い」を、全領域での実践を自指し探究している。それは「知性」の育みや「知」の創造・主題を置きつつも、「感性を磨く」ことを大切に、互いの感性を磨き、磨かれる経験の中で得られる知が、表面的な知ではない、実感に伴う深い「知」となるのではないかと考えている。

つまり、感性を磨く学び合いの目的は、「将来にわたって生きて働く資質」を育むためであり、そのための実感に伴う深い「知」は「感性を磨く学び合い」によって生み出されるものと考えている。

響き与え、対話や協同的な活動を通じ、多様な他者や文化とふれ、個性が磨かれるという経験を生みだし、新たな知や価値を見出すものとなった。

グローバル化が進む未来社会は、これまでの社会や経済を持続可能な方向に変え、多様な文化的、社会的背景をもつ一人ひとりがもてる力を発掘し、活躍できる場が求められる社会といえ、それは、かわりやつながりを重視した社会といえる。

三年間の本研究からは、地球的課題や人権問題、平和問題とのかかわり、自己や他者、社会や自然とのつながりから、物事をとらえ、ヒト・モノ・コトの価値を感じることで、「社会を築き、未来を切り拓く生徒」を育成することが出来る可能性を実感しているところである。